神　経　生　物　学
（旧・解剖学第三講座）

山口　淳

まず，以下に，「千葉大学五十年史」[1999年（平成11年）11月刊] の記述を転載・加筆する。

両生類の実験発生学の日本におけるパイオニアの１人であった初代鈴木重武教授は，1955年に急逝した。1965年第二代大谷克己教授が就任した。『千葉大学三十年史』に記述された事項以後の教室人事を列挙すると，1979年４月，田中宏一助手就任。同年４月，山田仁三助手，日本医科大学助教授に転出（現東京医科大学教授）。1981年４月，加藤軍四郎助手，県立医療短期大学教授に転出。1982年４月，杉田昭栄助手就任。88年３月，大谷克己教授停年退官。同年９月，千葉胤道教授就任。同年12月，徳永叡助教授，岡山大学教授に転出。1989年２月，龍岡穂積助教授就任。同年５月，杉田昭栄助手，宇都宮大学農学部助手に転出（現宇都宮大学教授）。1990年４月，稲生英俊助手就任。1997年３月，斎藤文代技能員定年退職。1998年３月，宮間和夫技官定年退職となっている。1978年以後本講座では，遺伝性小眼球症ラットを用いて網膜からの入力の断絶後の外側膝状体等での変化に関する研究が行われた。大谷教授は1980年から86年まで神経科学学会理事，1984年から1988年まで解剖学会理事長として学会の発展につくし，1988年４月，日本解剖学会名誉会員に選ばれた。大学院生として杉田昭栄，猿田敏行，寺澤捷年（現富山医科薬科大学教授），斎藤正仁，豊永直人が，また，研究生は堀井文千代，小林賢二，森石丈二，大沢一仁が在籍した。教育では神経解剖学と骨学を担当し，ヒトの脳のプラスチック包埋標本と連続切片標本が作製され学生教育に多大の効果を発揮した。

1988年 千葉胤道教授 歓迎会

第三代千葉胤道教授が就任した1988年９月以後の主研究テーマは，中枢自律神経系の形態と機能，神経伝達物質と受容体の免疫組織化学，軸索輸送を利用した標識法による神経連絡の解析，Nitric oxide 神経の心臓支配等である。この他細胞周期関連蛋白の神経細胞における発現，原子間力顕微鏡による受容体分子の観察，第二生理と共同で延髄呼吸中枢の機能形態学的研究が行われた。1994年斎藤文代技術員が組織解剖技術士として解剖学会奨励賞を受けた。千葉教授は1994年から1996年まで「解剖学雑誌」の編集委員長をつとめ，また1995年の日本解剖学会創立100周年記念大会（於東京大学他）では，学術担当準備委員をつとめた。教育は，神経解剖学，骨学の他，文系学生対象の生命科学「脳と神経のはたらき」，１年生の細胞分子生物学，医学概論を分担した。また，基礎配属（４年）とチューター制度（１年）が導入された。1998年度には，独立専攻大学院が設立され，本講座は神経生物学講座となり高次機能系統御機構の協力講座となった。研究領域は神経科学へと拡大し，ストレスと中枢自律神経系，アポトーシス機序の解析等がはじめられた。非常勤職員として，高橋美起子，境なるみ，押尾あつ子，坂井恵美子が在籍した。大学院生は，高岸正光，高綱陽子，本杉英昭，我妻道生，臼田岩男，花沢豊行，鳥飼英久，根本俊光，小林真理子，須関馨，山口潔，佐々木幸三，大鳥精司，大野一人，寺本靖が，また研究生として森永達夫が在籍した。

これ以降の同領域の歩みを略記すると，下記のようになる。

1998年（平成10年）４月１日
　　北城敬子技術職員，就任
2003年（平成15年）３月31日
　　千葉胤道教授，定年退職
2003年（平成15年）11月１日
　　山下俊英教授，就任
2007年（平成19年）11月30日
　　山下俊英教授，大阪大学大学院医学系研究科に転出

98年 教室旅行(熱海)

99年 千葉教授と教室員

2001年5月 千葉胤道教授と教室員

2003年11月，大阪大学より第四代山下俊英教授が赴任した。発足当初の教職員は，龍岡穂積助教授，稲生英俊助教，山岸覚助教，北城敬子技術職員であった。その後，山岸助教がドイツへ留学後，藤谷昌司が助教となり，龍岡助教授が千葉大学工学部へ教授として転出後，2006年４月に山口淳が准教授に

2005年 山下俊英教授 Ameritec Prize 授賞式
(Washington DC, USA)

就任した。また，稲生助教が退職，藤谷助教がカナダへ留学後，久保武一が助教に就任した。

山下教授の研究テーマは，「中枢神経の神経再生」である。以前は中枢神経は一度損傷すると再生しないと考えられてきたが，山下教授は中枢神経阻害因子（MAG, Nogo, OMgp）の受容体の一つがp75受容体であり，その下流でSmall GTPタンパクRhoが活性化し，中枢神経の再生阻害が起きることを解明した。就任中は，本学整形外科，脳神経外科，救急集中治療医学科，薬学部等との共同研究を行い，脊髄損傷・頭部外傷などによる中枢神経損傷後の新たな神経再生治療法の確立を目指して研究に取り組まれた。2005年山下教授は，ハーバード大学のZhi-

2007年 山下教授と教室員

2011年2月現在 研究室の様子(第５研究室)

gang He 教授と共に，脊髄損傷などの中枢神経障害を克服する治療法開発につながる基礎研究の分野で，優れた業績を挙げた研究者に贈られるアメリテック賞（米国）を受賞された。

山下教授の就任中に在籍した大学院生・ポスドク・留学生は，羽田克彦，藤谷真弓，遠藤光晴（現神戸大学助教），谷口順子，三村文昭，松浦威一郎，大島拓，石井宏史，遠山大介，藤田幸，川本玲，萩原芽子，京藤聡弘，吉田純子，大島洋一（京都府立医大），甲田将章（神戸大学），Carmen Chan，Xiaoxiang Liu（国費留学生），上野将紀，銅谷英雄，斎藤朋子，宮下智大，伊藤俊紀，藤由崇之，学部学生は，須田将吉，金子めいか，中田亮，有里裕生，高橋幸子，古賀俊輔，川口憲治，技術補佐員は，畑洋子，大石幸子，松永有紀子，野田順子，沢田愛可，佐野野衣である。

2007年11月に山下教授が大阪大学に教授として転出後は，中谷晴昭 医学部長が教室責任者となり，山口准教授，久保助教（現大正製薬），北城技術職員が教職員として教室を運営している。

2011年2月 抄読会の様子

現在の研究テーマとして，中枢神経疾患（脳梗塞，神経変性疾患）の分子生物学的な病態解明を行っている。また，産学官連携事業である「地域イノベーションクラスタープログラム都市エリア型「発展型」事業課題：「先進的地域基盤技術を活用した次世代型抗体創薬システム及び診断用デバイスの開発事業化」に参加し，東京大学・大学院新領域創成科学研究科上田卓也研究室との共同研究で「低分子抗体による神経再生・疼痛治療薬の開発」を実施している。

教育面では，形態形成学年森清隆教授を責任者として，１年生の「導入チュートリアル」，「スカラーシッププログラム」，２年生の「医学専門英語」，「神経科学／生理学概論」，３年生「神経科学」，「基礎医学ゼミ」，大学院博士課程の全専攻系特論「高次脳機能学特論」を担当している。

2011年２月現在，大学院生として，石井宏史，川本玲（休学中），川口憲治が在籍し，学部学生（スカラーシッププログラム含む）として，宮地秀明，菊地良直，浅井俊一，橋本尚英，藤井早紀子，金井瑞希，向井俊之が在籍し，忙しい学生生活の合間に，抄読会や基礎医学研究を続けている。

以上は，記念誌編集部の手助けを受け，山口が現時点でわかる範囲でまとめたものである。研究室に残されている昔の写真を掲載させて頂いた事，2000年前後の記述が少ない事，教室に関係された全ての方々の御名前を記載出来なかった事をお詫び申し上げます。

（やまぐち あつし）